

2023 年度

# 学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

# 2023年度 梅光学院中学校・高等学校 学校評価書 校長(樋口 紀子)

## 1 学校教育目標

### \* 学校目標

Beyond the Borders 「自分を超越る・国境を越える」

### \* 生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」: 授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」: 体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」: 学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

## 2 現状分析

- ・学び: ICTを活用することによって主体的な学びが通常の授業の形態となっている。グループワーク、ペアワークも授業によっては学年を超えて実施できるようになった。発表もスライドや動画を用いて実施するだけでなく、新しいアプリの使い方等は教員と共に研修会に参加することにより確実に向上している。また、単元別テストも通常化し、常に学び続ける姿勢が身についてきていると思われる。
- ・経験: 「新型コロナウイルス」に翻弄された「Wake-Up全員留学」プログラムも「コロナ」が5類になり、今年度は通常通り実施できた年であった。6月～7月にかけて、中学1年生はオーストラリアに1週間のホームステイ、高校1年生はフィリピン(セブ)の学校に3週間滞在し、学びと経験ができた。特に高校生は週末スラム街でボランティア活動ができたことが大きいと思われる。しかし、円安、燃油料の高騰により、オーストリアは実施できなかった。
- ・奉仕: 「サービス・ラーニング」の授業で、子ども食堂の支援だけではなく、幼稚園や施設に出向いて活動ができたことは「コロナ」が5類になった結果であると思う。また、「サマリア・デー献金」で教育支援をしている子どもの地域(カンボジア)に大学生と共に行き、支援チャイルドに会ったり、現地の学校を見学したり、子どもたちと交流したりすることができたことは生徒にとって大きな経験となったと思う。今後も継続できれば、生徒の経験も幅も広がっていくと思われる。

## 3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

- ・学び: 英語のプレゼンテーションコンテスト、「マッケンジー杯」でSDGSに関連する英語のスピーチを行っているが、年々英語力、発表内容が向上しているので、保護者だけではなく、外部に向かってオープンにして行くことが必要であると考えている。これによって生徒の学びの意欲にもつながっていくと思われるため、いつ、どのような形でオープンにするかというのが今後の課題である。
- ・経験: 「Wake-Up全員留学」やニュージーランド中長期留学も次第に「コロナ」前の実施形態に近づいてきたので、他の留学や研修等も今後、実施できるようにしていきたい。
- ・奉仕: 「サービス・ラーニング」を定着させ、もっと学外に出て社会問題を生徒の目で見て、それをボランティア活動につないでいく必要があると思う。

#### 4 学校評価総括(取組の成果と課題)

##### ・学び:

①ICT教育-教員と共に研修を重ね、新しいアプリ等を活用することによって、調べ学習、プレゼンテーション等の向上を目指す。

②進路指導-高2、高3に対する進路指導は早い段階から実施され、生徒の希望が把握できたが、中1～高1に対してのものは手厚く実施できるとはいいがたい。いつ、どのような形で実施し、それを教員間で共有するかが今後の課題である。

##### ・経験:

①Wake-Up全員留学-「新型コロナウイルス感染症」が第5類になり、海外に行くことができるようになったが、円安の影響により、費用が高騰しているため、中1は国を変更したり、期間を短縮して実施した。短い期間であっても充実した留学となるようにプログラムの工夫が必要であると思う。

②各種海外留学・研修-ニュージーランド留学は実施できたが、他の留学・研修等は費用の高騰によりできなかったものがある。サマリアデーの支援地、カンボジアに行くことができたのはよかったと思うので、今後もこの実習は継続したい。

③危機管理:Wake-Up全員留学(高1、フィリピン)、「海外ボランティア実習(カンボジア)」等で病気になり、入院する生徒が出た。これに対して予防、病気の対応、予後のケア等の対応策を整えなければならぬと感じた。

##### ・奉仕

①ボランティア活動-一人でも多くの生徒に「サービスマーケティング」を履修させることによって、よりボランティア活動を充実させたいと思う。

②サマリア・デー-「海外ボランティア実習」に参加した生徒に、礼拝等で経験を発表してもらうことによってサマリアデー献金に対する意識を高め、支援地を訪問する生徒の数を増やしたいと思う。

#### 5 次年度への改善策

・学び:ICTの活用に関しては、高等教育での学びを視野に入れ、iPadの活用の中に、キーボードの活用を加えていきたいと思う。また、ICTの研修会に教員だけでなく生徒を加えたことがICTの活用の充実につながったので、来年度も生徒も交えての研修会を実施したいと思っている。

・経験:「Wake-Up全員留学」を実施するだけでなく、コロナ前に実施していた留学や研修の復活、及び新しい海外への留学・研修等を開発、実施することでできればと思う。

・奉仕:「サービスマーケティング」の拡大と、支援地を訪れる「海外ボランティア実習」を大学生と共に実施できれば、「サマリアデー」に対する理解と関心が深まると思われる。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（学年）

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
中学校	①	生活と学習の場としてのコミュニティを作る（支え合う学級、学年、中学となる）	<p>○生徒会（委員会）活動を通して生徒主体の学校を作る。</p> <p>○「全員担任制」によって学校全体で生徒一人ひとりをケアする。欠席者への対応は、事務室とも連携する。</p> <p>○「全員担任制」によって一人ひとりの生徒の情報を全校で把握する。</p>	<p>A 支え合う学級、学年、中学校が達成している</p> <p>B 概ね達成しているが一部達成できていない</p> <p>C 多くの場面で達成できていない</p>	<p>・梅光祭・合唱コンクールなど様々な場面で生徒が中心となって進行することができている。</p> <p>・昨年度の課題であった中学生徒会も一日研修を企画するなど中学生徒会が主体となる活動を実施することができた。</p> <p>・今年度は行事の際には教員を固定することによってよりきめ細かな指導や見守りを行うことができた。</p>	A	<p>・来年度の体育祭はスポーツ大会として中高別で実施していく予定なので、さらに中学生が主体となる活動が増えていくと考えられる。</p> <p>・今年度から個人担当がなくなり、担任団としての情報共有はさらに密に行わなければならない状態になったので、より意識しながら情報共有ができたと思う。まだ、週が変わった後の連絡や引継ぎがあったのでより密な情報共有をする必要がある。</p>	只木 徹
	②	学習習慣の確立	<p>○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける。また、カレンダー機能を活用して、勉強のスケジュールを把握しやすくする。</p> <p>○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる。</p> <p>○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す。</p>	<p>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</p> <p>B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する</p> <p>C 多くの生徒が達成できていない</p>	<p>・カレンダー機能やTeamsを活用しながら、スケジュール管理を行い学習習慣を定着させている生徒が増えた。</p> <p>・今年度は個人担当は設定せずに、担任団で情報共有を密にしながら支援を行った。</p> <p>・留学では人間関係のトラブルがいくつか発生したが、その都度対応を行った。帰国後も継続した見守り、指導を行った。</p>	B	<p>・学年が上がるごとに学習習慣を身につける生徒は増えているが、単元テストや課題に追われて体調・精神面で不調を訴える生徒が出ている。今後はそういった生徒に対するきめ細やかケアが重要になるだろう。</p> <p>・絆キャンプや留学、1日研修など多くの場面で生徒同士のコミュニケーションの場があることで、トラブルも起きつつ人間関係の形成能力を高められている良い機会となっている。</p>	

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
高等学校	①	自立した学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける</li> <li>○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる</li> <li>○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す</li> </ul>	<p>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</p> <p>B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する</p> <p>C 多くの生徒が達成できていない</p>	<p>○単元別テストは実施4年目で生徒・教職員とも滞りなく進めることができている。ただし、成績の締め切り日が近づくに連れて単元別テストが増加するなど、本来の目的とは異なる現象も生じ始めている。</p> <p>○全員担任制で個別担任制をなくすことによって、教職員・生徒の自主制が育まれ始めている。担任団からの仕組改善の提案や生徒が自ら教員を指名し、サポートを受ける姿勢が見て取れる。</p> <p>○留学はコロナ明けでの、体調不良者続出で大変苦労したが、その体験を前向きに考えられる生徒が多く育ったこと、また学習意欲へつながったことが成果である。</p>	B	今年度から個別担任制を廃止し、本当の意味での全員担任制をスタートさせることとなった。保護者からの問い合わせ対応、問題を抱える生徒の対応等一部の教員に対応が偏ってしまったことは想定内ではあったが、それぞれの得意分野を活かして担任業務を行うことの第一歩を進めることができた。あとは教職員がそれぞれの特性を把握し、得意分野で実力を活かすことが出来、かつお互いがその得意分野を尊重し、信用・信頼をさらに深めるところまで持っていくことが次年度の課題である。	重村雄太
	②	自己の進路について考え、進路目標に基づいて学校生活を設計する	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路を考えるプログラムを行う</li> <li>○模擬試験の利用とその振り返りの機会を設ける</li> <li>○高大連携プログラムを進路指導に結びつける</li> </ul>	<p>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</p> <p>B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している</p> <p>C 多くの生徒が達成できていない</p>	<p>いずれも滞りなく実現することができた。模擬試験に関しては特に高1の対策講座を工夫し、意欲のある生徒を集めたことで大きな成果を出した。</p> <p>高大連携に関しては入試における志望理由書などや面接などで活用し、合格する生徒たちも以前に比べて増加した。</p>	A	進路プログラム、模擬試験、高大連携に関しては一定の型が出来上がり、確実に実施できている。現状に満足することなく、型に修正を加え、次年度につなげていく必要がある。今後の課題としては中学段階からの準備ができるようにプログラムを再構成・再構築していく必要がある。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	① 言葉によって見方・考え方を深める	<p>○作品を主体的に読み、言葉を通じてさまざまな価値観に触れ考えを深める。</p> <p>○ものの見方・考え方を言葉から読み取り、他者と協働しながら創造的・論理的に思考する力を養う。</p> <p>○言葉によって物事を深く、広く、豊かに感じ取りかつ味わうことのできる能力を身につけ、生涯にわたり国語を尊重し、能力の向上を図る態度を養う。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○作品を通じて筆者の考え・主張を正確に捉えることができた。</p> <p>○筆者の考えをもとに現代社会における課題を他者との協働を通じ見つけ、解決に向け思索することができた。</p> <p>また、作品の内容を鵜呑みにするのではなく、批判的に読む機会を設けその読解方法を経験することができた。</p> <p>○筆者の言葉の使い方、工夫点を見だし、言語活用について学ぶことができた。</p>	B	<p>○作品の主題・内容をグループワークなどを通じて正確にかつ生徒主体で読み取ることができた。</p> <p>○他者との協働を通じ現代社会の問題と関連付けることができた。また批判的に読む機会を設けることはできたが、身につける段階までには至らなかった。</p> <p>次年度はこの点を重点課題とし、教科として工夫していきたい。</p> <p>○言葉を通じ表現の工夫点を見出すことができ、国語力を高めることができた。</p>	川口駿純
	② 適切な言語能力の育成	<p>○論理的かつ適切な言葉を使用いて、自分のものの見方・考え方を伝える力を養う。</p> <p>○古典を通じて言葉の歴史・変遷を学び、言葉の持つ価値を認識し、国語に関心を持つ。</p> <p>○発表などを通じICTスキルを高めつつ、思いを正確に伝える意識を高める。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○作品を通じて身につけた自己の考えを論理的に述べる事ができた。</p> <p>○言葉の変遷や歴史を通じて現代の言葉との比較を行い、国語に対する関心を持つことができた。</p> <p>○多くの科目でプレゼンテーションなどICT機器を活用しながら自己・グループの意見を伝えることができた。</p>	A	<p>○作品に対する自己の意見を言語活動を通して持つことができた。</p> <p>○言葉の変遷・歴史を通じて現代の言葉と比較を行うだけでなく、言語の持つ意味・価値に触れることができた。</p> <p>○プレゼンテーションを通じICTスキルだけでなく、表現力を含む言語能力を向上させることができた。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	① 基礎学力を育み、学習意欲を高める	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テスト等を通じて生徒の理解度を把握しながら、学習意欲を高めるように授業を工夫する。</li> <li>○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。</li> <li>○多彩な資料を準備しICTをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テストや小テストを用いて、生徒の学習状況を把握し、授業改善に努めた。</li> <li>○家庭学習習慣の定着が思うように進まなかったことがあった。</li> <li>○全科目において、ICTを活用し、生徒の能動的な授業参加を促した。</li> </ul>	B	<p>単元別テスト後、長期的な学習内容定着を徹底することができなかった。</p> <p>ICTなどを活用し、教科科目への興味関心を持ってもらえるよう努めたが、基礎学力の定着については課題が見られる。</p> <p>授業内の取り組みなどについては、いずれの学年においても積極的・意欲的姿勢が見られた。</p>	広木光
	② 過去や現代の社会問題に関して理解・関心を深め、自分の考えをアウトプットする	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各単元に関連する社会問題を提示する。</li> <li>○生徒の社会問題についての疑問や関心事項を、単元内の学習内容に結びつける。</li> <li>○生徒がアウトプットをする機会を増やす。</li> <li>○発表前後の意見交換を通じて、より相手に伝わりやすい表現を模索できるよう支援する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各単元に関連する社会問題を提示するよう努めた。</li> <li>○演習科目では、生徒の社会問題についての疑問や関心事項を学習内容に結びつけることができた。</li> <li>○演習科目においては、生徒のアウトプットの機会を多く持つことができた。</li> <li>○発表をする際には、生徒同士が意見交換を通じて、よりよい表現を模索できるよう促した。</li> </ul>	A	<p>現代社会における問題と生徒が学習している内容はどのように関連しているかについて留意した授業づくりをおこなった。</p> <p>生徒自身が、社会問題への理解と解決策の模索ができるよう促し、生徒間で共有する活動を通して、表現力向上もはかった。</p> <p>資料を分析し、結論を導き出すため、粘り強く取り組む姿勢を持てるよう促した。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数学	① 分かる授業の展開	<p>○生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。</p> <p>○教科への興味関心を呼び起こすため、タブレットなどICT機器を活用し、グラフ作成ソフトなどを通じて視覚的に理解を深められるように工夫する。</p> <p>○生徒の主体的・対話的な深い学びの実現のため課題や発表を積極的に取り入れる。</p>	<p>A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p>	<p>○単元別テストを生徒の状況に合わせて細かく設定して、取り組みやすい環境にした。</p> <p>○タブレットを使い、授業中の説明だけでなく、質問・提出物確認のため、積極的に活用した。オンライン授業のときも丁寧な対応ができた。</p> <p>○生徒間で話し合いをさせたり、生徒の解答をお互い見ることができるようにして、解答方法や各自の意見を共有した。</p>	A	<p>○単元別テスト・再チャレンジテストに向けて、通常の授業内容の向上に努めた。</p> <p>○常勤教諭、非常勤教諭関係なく、タブレットを効果的に活用した。昨年同様、出勤しない日もあるため、タブレットを通じて、前もって課題を配信したり、後日、フォローした。</p> <p>○生徒同士で、解答を確認させ、お互いの意見や考えを共有できた。数学的にBESTな解答を確認した。</p>	崎山章
	② 基礎力・応用力の育成	<p>○日々演習にきちんと取り組むよう指導し、高い提出率の維持に努める。</p> <p>○単元別テスト後の再チャレンジを徹底することで、基礎学力の向上を図る。</p> <p>○過去問などの演習を行って、入試に対応できる応用力を身に付けさせる。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○未提出者への声掛け、提出者の内容の確認などまめに行なった。</p> <p>○再チャレンジに向けて、質問の時間を用意し、より確実に理解できるようにした。</p> <p>○演習の時間は、過去問等が載っているテキストを使用し、指導・解説した。教科書の内容を終わらせることに時間を足られてしまい、十分な演習ができない単元もあった。</p>	B	<p>○未提出者には、週担当・個人担当の教員を通じて声掛けをした。また、提出物の内容確認も徹底して、達成できていない生徒には対応した。</p> <p>○放課後の時間が確保できず、成績下位者への指導はもう少し工夫が必要だった。</p> <p>○教科書の内容を徹底することに時間を使ってしまい、演習部分が不十分であった。次年度はこの点を改善していきたい。模試の事前対策授業も継続していきたい。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	① 自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	<p>○基礎学力の向上と、主体的な学びができるようになるために、予習と復習を習慣付けられる課題を配布する。</p> <p>○生徒自らが疑問を持ち、実験により、解き明かしていく過程を学び、実験手法やその結果をもとに、自然の物事や現象を質的・量的な関係や時間的・空間的な関係から説明できるように授業を工夫する。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○授業前の小テストの実施や学習時間の記録の提出とフィードバックにより、予習と復習の習慣づけを行った。</p> <p>○積極的に実験の回数を増やした。教科書的な実験だけでなく、目的から実験をデザインするような授業も行った。前年度よりこのような授業の割合は高くなったが、生徒自身が進んで説明するところまでは到達していない。</p>	B	<p>○生徒に学習時間を記録してもらったことで、どの程度の学習時間でどの程度の点数が取れているのかを、生徒自身も理解することができた。また、学習時間とテストの成績を結び付けて考えるようになったり、学習の方法や時間の使い方を考えるようになった。</p> <p>○実験を行ってはいるが、まだ生徒が積極的に疑問をもったり、実験を考えたりすることはできていない。</p>	西尾潤
	② 自然の物事・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	<p>○授業における観察・実験の割合を増やし、現象を実際に確かめながら理解するように指導する。</p> <p>○生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。</p> <p>○観察や実験から得られた結果を比較したり、関連付けたりできるように、授業をデザインする。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○授業における実験や観察を増やすことができた。</p> <p>○探究的な授業の割合を増やした。探究的な活動を理解し、実験を行っている生徒が増えた。</p> <p>○特定の試料を観察する際には、似ている他の物も観察するように試料を準備し、比較できるようにした。また、実験の授業では対照実験を意識した授業を行った。</p>	A	<p>○実験や観察を行ったところは単元別テストの得点率が高く、実験や観察を学習と結び付けられている生徒が多かった。</p> <p>○探究的な授業では授業内外で質問を行い実験を進めようとしたり、実験を積極的に進めようとする生徒が増えた。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
保健 体育	① 積極的に運動に親しむ資質や能力の育成	<p>○個人の授業記録により、自身の成長や能力を客観視させ、達成感や満足感に繋げる。</p> <p>○グループワークを通して、主体的・対話的な深い学びを身に付ける。</p> <p>○iPad等のICT機器を活用した協働的な学習を促す。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○各種目でipadを用いて自身の動作の確認や記録を行い、課題発見や問題解決に役立てることができた。</p> <p>○グループワークを通して自身の問題点を生徒同士で客観的に指摘し合えるなど、意見交換も活発に行われ、技術の向上においても効果的であった。</p> <p>○見本となる動作はデジタル教科書ですぐに確認をするなど、タイムレスに調べる習慣が身についた。</p>	A	<p>○iPadで自身の動作を撮影し数値を記録することで成長が実感でき、更なる学習意欲の向上に繋がった。</p> <p>○グループワークでは自身の映像や記録を客観視できるだけではなく、クラスメイトの記録向上に向けた改善策の提案や健康状態の気づきなど、深い学びに繋がった。</p> <p>○教科を横断した学びや、スポーツの動作や知識の日常生活での応用など更なる深い学びを実践していきたい。</p>	森田
	② 生涯を通じて周囲の人々と継続的に運動ができる資質や能力を育てる。	<p>○グループ活動の主体的・対話的な活動の中で集団で体を動かすことの楽しさを学ぶ。</p> <p>○ICT機器を活用したチームの動作確認や戦術分析を通して、周囲の人々と各種目の特性を楽しむ能力を身につける。</p> <p>○授業中の大会運営はもちろん、体育祭、クラスマッチ、スポーツ大会等の企画・運営に関わる中で、実践するだけではない、スポーツの楽しさを学ぶ。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○iPadやプロジェクターを活用して、生徒同士で活発な意見交換が行われるなど、技術の向上だけではなく、コミュニケーションの一つの手段としてICT機器は効果的であった。</p> <p>○各種目ごとに適切な運動強度やルールを設定することで、生徒の意欲的な活動を引き出すことができた。</p> <p>○授業の中でのミニスポーツ大会や体育祭、クラスマッチを通して、運動するだけではないスポーツの楽しみ方、関わり方を学ぶことができた。</p>	B	<p>○運動が苦手な生徒でもICT機器を活用することで技術の向上や対話的な活動を活性化することができた。</p> <p>○運動強度やルールを工夫することで、種目の特性を楽しむ能力が身についた。</p> <p>○大会の規模や他者への貢献をさらに深めるためにも、今後は学年横断型の授業や大会などを実施していきたい。</p>	裕介

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	① 主体的な音楽活動を通し、音楽を愛好する心情を育てる。	○基本的な音楽知識の習得。 （単元別テストによる、ペーパー、実技テストの実施。） ○主体的に歌唱・器楽をしようとする態度の育成。○鑑賞（ICT機器を活かして、クラシックからポピュラー音楽、ジャズや映画音楽まで幅広い音楽鑑賞を通して生涯に渡って音楽を愛する心を育む・ワークシートの活用	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○生徒の実情にも配慮した細やかな単元別テストの実施により、ペーパーテスト、歌唱、また今年度は普通科においても鍵盤楽器の実技テストも実施、主体的な生徒の取り組み学びに繋がった。○タブレット等ICTの活用により、実技の課題録音などを通して指導が出来ることで、より生徒一人一人と繋がることができ、細かい個別指導ができた。○定期演奏会、卒業演奏会では、クラシックにおいても交響曲のメドレーや、ポピュラー音楽、ジャズまで、聴衆を意識したプログラムに挑戦、より高いレベルの内容、課題に取り組むことで生徒一人一人の力はもちろん、アンサンブル活動における充実が顕著に現れた1年であった。○普通科では和楽器の体験型学習を伴った演奏会、音楽科においては3回に及ぶ大学教授陣によるレッスン講座などを通して、生きた音楽の実体験の機会をつくることで、その後の生徒の取り組みの変化、成長に繋がった。	A	○音楽科の演奏会活動や朝の礼拝での奏楽の活動等を通して、教科のみならず、クラスとしての学びがあったことも大きい。合唱祭を通した歌唱指導、梅光ヴィジョンの「ハンドベルに全員が演奏に触れる事」、ピアノの演奏実技、また鑑賞指導の充実を図ることができた。○PowerPoint作成や司会進行まで、生徒が中心となつてすることで、演奏するもの、鑑賞するものとの一体感をより持つことができ。豊かな音楽活動の共有に繋がった。○成長の機会をつくるべく、音楽科において年に3回の特別講座を実施、素晴らしい成長の機会となった。一方で、他の学校行事とのバランスを考慮する必要も感じた。	大森 道子
	② 主体的な音楽活動を通し音楽活動で豊かな感性を育む。さらに専門性を高め、将来の音楽活動の礎を作り上げる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○演奏活動を中心とした授業。（今年度から歌唱、ハンドベル演奏に加えて、普通科の音楽授業においても、ピアノ実技レッスンを本格的に取り入れる新たな取り組み。より主体的に目標をもって練習することや、仲間やクラスで共に音楽を高めていこうとする姿勢の育成（今年度から電子ピアノの導入、中学生は一人1台、多いクラスでも2人で1台を用いて）○入試問題への取り組み。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○音楽科においては、授業での実技レッスンの方法やアンサンブルではそれぞれの楽器を生かし、演奏会の為だけでなく日頃からの力をつけていくことなど、前年度に様々な課題が取り上げられていたが、今年度は特別講座など様々な機会も④多く、生徒自身が自ら放課後でも練習室に残って、練習して帰る生徒が増えたことで、お互いに良い刺激を受けながら継続的に努力する生徒の取り組みにより、レベルアップの一因となった。○歌唱、ハンドベルに加えて、電子ピアノの導入により、ピアノ実技のスタートを切ることができた。初心者グループと経験者グループとのアンサンブル等、ピアノ実技に関してはこれからもっと生徒の実態に合わせて取り組みの工夫を重ねていくことが大切だと感じている。○生徒の進路や実態に合わせた入試問題の取り組みに努め、結果を出すことができた。	A	音楽科の定期演奏会や卒業演奏会では、音楽科中心とした行事から、学校行事としてより生徒一人一人が目標をもって取り組めたことが大きかった。聴衆である生徒たちの、自主的な鑑賞活動に繋がったこともよかった。同時に、卒業演奏会の実施において今後生徒の実情に合わせて内容や時程の調性も感じている。○高3生においては、高い目標設定を持ち入試問題や課題に取り組めた。○音楽科全体においても、単元テストによりさらに深く内容を進められ、多くの生徒が回を重ねるごとに、良い点数を取ることが出来、学習意欲の向上、変化を感じた。○合唱祭においては、生徒の主体性を促しながらも、その内容と指導の在り方について今後改善が求められる。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	① ○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。また、欠席の多い生徒については、担任団と連絡を取り合って取り組ませようとした。	A	・各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。 ・不登校気味の生徒の作品製作については、工夫が必要であると感じた。	西大成
	② ○ICTを活用した美術活動を体験する。（中学校）	○タブレットを活用して、作品提出させたり、お互いの作品を鑑賞する。 ○美的感覚や価値観を日常生活の中で、主体的に表現できる。	アンケート等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	・製作時間の多い学期に向けて、進捗状況と照らし合わせ、教材の選定をし直した。 ・オンライン授業などの機会が減ったことで作品の提出は現物のことが多かった。	B	・作品に対して、主体的な作業を重視し、他の生徒と関わりあいながら作業を進めていくのではなく、自分と見つめあいながら仕上げる体験を意識させた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	① 4 技能5領域のスキル向上 (これに加えて、英検の2級以上の取得率の向上)	○基本的に授業は英語で行う。説明を日本語で行うことはしない。生徒はその授業を通して英語を用いて英語を学ぶ。 ○英検については、1年を通じて対策の講座を開くのと、Weblio（オンライン英会話）を英検のリスニング・スピーキング対策に使っている。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○英語の授業は基本的に英語で行う原則は貫かれていた。生徒は英語だけで運営される授業に慣れ、英語を用いること（聞き、話し、読み、書く、対話する）で英語を学ぶことができている。 ○英検の対策講座は、年間を通して行ったが、参加する生徒が少なかった。しかし準1級など高いレベルの級の合格者を輩出した。	B	○生徒にとって英語だけの授業への抵抗感がなくなっていないかどうか。英語だけの授業だと意味がわからない	只木 徹
	② ICTを活用することによる英語学習への意欲向上・日常的に英語に触れる機会の確保	○Quizletを活用し語彙学習を行う ○Weblio英会話を通じて日本語が母語でない英語話者と英語で会話する楽しさを知る ○X ReadingやEnglish Centralなどを自主学習にも取り入れる ○上記のものに加え、その他のICTソフト、プログラムなども用いて、より効率的・効果的な英語学習ができるよう努める	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている		B	現在、ロイロノートやX Reading、Quizletなどを使うに留まってしまっている。より生徒がICTを使いこなせるように指導していき、自主学習にも取り入れてもらえるようにしていきたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
技術・家庭	① 実践的な授業の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基礎的知識・技術の定着</li> <li>○ICT機器を活用した教材の工夫</li> <li>○実習を通じて危機管理能力やコミュニケーション能力を身につけさせる</li> </ul>	<p>A：80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B：60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C：50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ICT機器や、アプリを活用し、家庭科の基礎知識を身に付けることができた。</li> <li>○調理実習や消費生活についてグループワークから発表を行っていくことで危機管理能力を養うことができた。</li> </ul>	A	家庭でも取り組める内容の課題を与え、「食」という面から家庭での役割を意識を持たせた。このような活動を通じて、家族とのコミュニケーションにもつなげることができた。	山崎 廉知
	② SDGsなどを意識し、環境に配慮した家庭教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ただの木工で終わらず民族工芸品の作成をすることでグローバルな視点も身につける。</li> <li>○破れてもすぐ新しものを購入するのではなく、自らの手で、修繕できる裁縫の技術を身に付ける。</li> </ul>	<p>A：80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B：60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C：50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体験授業をさせ、ものづくりの楽しさを味わうことができた。</li> <li>○感染症対策をしながら、調理実習も実践した。食材を無駄なく使うことにも配慮した。</li> </ul>	B	感染対策を十分にして調理実習を実施した。各学年、デザートやドライカレーなどを調理することで、「食」に対する興味を持たせた。また、中1では、賛美歌カバーを作成し、学校生活で使用する教材を大切にすることと裁縫技術を学習した。次年度は、地域の特性を生かしたような調理実習とさらなる技術向上に努めたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
情報	① 情報モラル教育の充実	<p>○ニュースなど身近な話題で情報モラルに関係したものがあれば、随時生徒に提供していく。</p> <p>○生徒同士の話し合いを通して、情報モラルについての理解を深めさせる。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○SNSの安易な投稿による炎上事件やいじめなどのタイムリーな題材を扱ったり、情報モラル教室では下関警察による身近な事件を用いて研修をしていただくなど、情報モラル教育の充実を図った。</p> <p>○ワークシートやグループワークを通して情報モラルに関して理解を深めようと試みたが、活発な意見交換までには至らなかった。</p>	B	<p>○情報モラルに関して多くの生徒は正しい知識をもって行動に移しているが、全員に十分に伝わっているとは言い難い。</p> <p>○今後はさらに本校の現状と課題に即した内容の授業や研修を実施していく。</p>	森田 裕介
	② プログラミングやシミュレーションによって問題を発見・解決する活動を通して、問題解決にコンピュータを積極的に活用しようとする態度を通じて情報社会に主体的に参画しようとする。	<p>○中学校までの成果を踏まえ、身近な動作をアルゴリズムをフローチャート等で表現する方法を理解できるようにする。</p> <p>○関数及び配列について理解するとともに、身近な関数を作成し、身の回りの簡単な問題についてコンピュータを活用する。</p> <p>○身近な問題を発見するとともに、解決に向けてのアルゴリズムやモデル化を考え、プログラミングやシミュレーションなどを用いて問題を解決する。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○マイクラフトを活用して、下関市都市計画における課題を解決できるような建築物や街を、プログラミングを用いて制作することができた。</p> <p>○人口減少や人件費削減のための解決策として、プログラミングを用いて自動会計AIレジを制作するなど、プログラムのしぐみを学んだ。</p> <p>○データ分析ではExcelを用いて、フードロスをなくすための未来の販売数予測を行うなど、身近な問題をコンピュータを活用して問題解決を図った。</p>	A	<p>○マイクラフトやExcelなど身近なソフトを利用して、プログラミングや探究活動など教科横断型の授業を実施することで、問題解決にコンピュータを積極的に活用しようとする態度を身につけることができた。</p> <p>○ICTコンテストでは、応募作品がそれぞれ金賞、銀賞を受賞するなど、問題解決力や表現力を育むことができた。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	① 福音を聞くこと、知ること、信じること。神と自分と他者と、神の造られた被造物(自然や動物)を愛し仕える生き方(キリスト教精神、普遍的価値である人権や平等や博愛)を身に着けること。	歴史にわたって人々を励ましてきた旧約聖書・新約聖書テキストから、キリスト教の英知を学ぶ。現代の諸問題を取り扱い、いかに考え、いかに生きるか、アクティブラーニングを通して、生徒同士が学び合う。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	1学期に「イエスとは誰か」を36項目に分けて学んだ。キリスト教の主人公、新約聖書の核心を理解した。また2学期には「命とは何か」について、粗末にされる命の報道が世界中にあふれる中、様々な観点から「命の大切さ」について学習した。また一年間の宗教活動を分かち合った。全学年を縦割りにして、毎学期4-5人でグループワークを行い、お互い助け合い、作品を作り、発表を行った。中高6学年が、同じミッションスクールの中で、同じ大切なことを分かち合う機会となっている。	A	中学生にして、毎週、高校生と一緒に学ぶことの出来る科目である。道徳や宗教、心の領域を扱うので評価、採点は難しいが、表に現される個人制作物や提出によって、また発表や相互評価によって、達成が評価される。先輩と後輩の相互作用が働いて、特別な経験になっていると思われる。	後藤 献一
	② 聖書、キリスト教文化を理解し経験すること。	学内外のキリスト教行事、地元の教会の礼拝に出席し、信仰生活を中高生のうちに体験する。そのフィールドレポートを提出する。継続して参加するよう勧める。礼拝において主体的に参加し、奉仕をする。ボランティア活動を経験する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	各学期2～4回は地元の教会の礼拝に行き、レポートを提出するようにしている。学内のBCC(Baiko Community Chapel)や春と夏のバイブルリトリート、クリスマス会もあり、自由参加プログラムだが、生徒たちは積極的に参加している。1年の終わりに、ボランティア活動も含め、全員に年間の「宗教」活動におけるフィールドワークをスライドにまとめ、発表してもらった。様々な教会との交流が観て取れ、互いに啓発された。	A	全員がこのフィールドワークを達成できるように、発表の場所を作り、リマインドを行った。年間通じて、ボランティア活動を何回もする者とならない者があるため、出来るだけ多くの生徒に参加してもらう工夫が必要である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ド ラ マ	① 自分の資質を発見し、それをより豊かに広げる	○ドラマエデュケーションの基本的なエクササイズを通じて自分の資質と向き合う。 ○毎回の「ふりかえりシート」で自分の中の感情の動きを言語化する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○コロナ禍で、小学校時代に友人とのコミュニケーションをとる機会が少なかったと思われる中学校1年生に対しては、通常よりも多く「人と関わる」事を体験させるエクササイズを増やして行った結果、「作品創り」に積極性を見せる様になり、他社とアイデアを共有する面白さを理解しつつある段階まで進んだ。他学年も、自分なりの表現を楽しんでいる。 ○自分の考えを書くだけでなく、自分でない誰か他の人物としての「日記」を書くなど、多方面から言葉を刺激した。最初はとまどいもあったが、学年末にはかなりスムーズにかつ、楽しんで書ける様になった。	A	○生徒の日常のコミュニケーションのありかたが急速に変化していく中で、どのようにプログラムを組み立てていくか、臨機応変に、授業の中で「楽しかった」で終わらせない、日常に落とし込めるキーワードを多く含んだプログラムを構築し続ける事が必要。	大 塚 恵 美 子
	② 自分と違う「他者」を意識し、コミュニケーション、プレゼンテーション力を向上させる	○「コミュニケーション」「リーダーシップとフォロワーシップ」をキーワードにして、クラスの特性に沿ったプログラムを組む。 ○「短い作品創作とクラス内発表」を繰り返すことで、自分と違う「他者」と協力して一つの物事を成す経験を積む。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○作品創りに要する時間が短くなってきている。相手のイメージを汲み取り、共有し、具体化する作業に慣れてきた結果だと思われる。 ○高校生には、音響や照明といった、「演じる」以外の表現手段が得意な生徒がおり、その生徒たちが活躍できる場を設定したことで、「自分が自信を持ってできることで責任を果たす」経験を積み上げることができた。	A	○一度にたくさんの人間が動く作品発表を通して、「自分がどう動けば他者がより気持ちよく参加できるか」を考える事が当たり前になるように、根気よく積み重ねていくことが必要。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
教務部	① 授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○単元別テストによる授業回数の確保 ○オンラインテストの開発と実施	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	新型コロナウイルス5類感染症移行にともない、オンライン授業の実施回数も減少したため、オンラインテストの開発と実施が進まなかった。 授業時数は十分に確保された。	A	年間行事予定について、職員会議で複数回審議しながら、教育目標に沿った行事となるよう、行事内容の精選・変更を行った。 単元別テストについては、全校で授業日や実施回数を確認できるよう、職員室内に単元別テストカレンダーを設置。強化担当だけでなく、担任団の教科指導の一助となった。	只木徹	
	② 学校行事や時間割などを適切に計画し、また、教材備品等の環境を整える。	○授業に支障のないように、時間変更や教材の発注を行う。 ○時間割編成時、完成時に必修科目を確認する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	授業変更等は、各教科の協力を得ることができ、問題なく変更を処理できた。教材について、必要教材調査を実施するなどし、適宜発注できた。 時間割作成後必修科目のチェックを行うことができた。	B	担任団や各分掌行事による授業変更作業について改善が必要な場面が多く、今後さらなる連携を必要とする。 対策として、年間行事予定に詳細を明記すると良い。		
	③ 学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○校務システムBLEND運用において、日々の出欠席を週担任と教務部でダブルチェックする仕組みを確立する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	転入試験に適切に対応して処理できた。また、退学や転出事務についても適切に迅速に行えた。 BLEND運用について、適宜本校の状況に合うよう設定を整えた。出席簿のダブルチェックに関しても徹底することができた。	A	生徒異動に係わる業務について、フローチャートを作成するなどし、円滑に処理した。 出席簿については、担任団・分掌教員協力を得ることができ、円滑に確実に行うえつつある。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
生徒支援部	① 自主的に学校生活を送るよう支援する	○円滑な生徒会・委員会活動のために助言・サポートを行う。 ○円滑な生徒会・委員会活動のために教員間で情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	・生徒が中心となって様々な活動を実施することができているが、計画的な遂行や情報共有が不十分な場面があった。	B	・生徒の動き出しの遅さや教員の声掛け・サポート不足、情報の変更の多さなど様々な要因があげられる。余裕を持った計画案の作成や業務の遂行のために生徒・教員間、教員間同士の情報共有の機会を十分に設ける必要がある。	只木徹	
	② 発達障害等に関して全教職員で情報を素早く共有し健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教職員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	・昨年同様、BLEND・Teamsを活用して、記録と情報共有を行うことができている。一部、情報が伝わらない状況も見られた。	A	・BLEND・Teamsでの情報は有効だが、様々な情報が流れて来るので見逃してしまう場合も多い。重要な情報を伝達すべき教員に確実に伝えられる工夫を行う必要がある。		
	③ 問題行動に関して全校で情報を素早く共有して生徒の健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教職員で情報共有のための会合を行う。 ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する。 ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	・昨年同様、BLEND・Teamsを活用して、記録と情報共有を行うことができている。	A	・昨年度と比較すると問題行動が起きた際に、生徒支援部で対応する前に担任団が迅速に対応する場面が増えた。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
進路指導部	① 高川生徒の希望進路実現を支援する。	○高川生徒が進路志望を固め、希望進路に進めるように支援する。 ○支援方法は、高川生対象の進路相談、課外授業、個別指導、小論文指導、面接・プレゼン指導等による。 ○FINE SYSTEM、Compass、K-Navi等の効果的な活用を検討し、生徒保護者に適切な情報を提供する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○総合型・学校推薦型選抜による入試をうまく活用し、ほぼすべての生徒が年内第1希望に合格することが出来た。 ○各支援を効果的に行うことができ、北九州市立大学に3名、また総合型で西南学院等難関大に合格させることが出来た。 ○保護者総会、二者・三者面談等で情報提供を行ってきた。ただ、生徒個人の可能性をさらに引き出すため、近隣の大学のみにとらわれるのではなく、学問や研究内容からさらに上のレベルを目指した進路選択ができるように情報提供をしていく必要性を感じている。	B	第一志望に掲げていた希望進路をかなえた生徒が多くを占めたことは大変喜ばしいことである。これも探究等で将来や学びたい学問から逆算し、希望進路を実現させる取り組みの成果といえる。しかしながら、実力はあるながら、いわゆる「安全牌」を選択し、満足してしまっているという一面がある。教師・生徒・保護者を含め、本当にそれでいいのかを見直し、進路指導を続けていく必要があるのではないかと考える。		
	② 生徒の進路実現のために進路検討会、進路希望調査、ガイダンス等を定期的に実施し、全教員で生徒を支援する体制づくりをする。	○進路検討会を各学年学期に実施する ○進路検討会の結果に基づき、担任団は教科担当に注力すべき生徒やクラスの現状を伝え、成績向上のための指導を実施してもらう。 ○中学から高校までの6年間の進路指導計画を探究を中心に考案する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○進路検討会を全体で満足することはできなかったが、各担任団・教科のレベルで情報共有することはできた。 ○各教科で情報共有し、非常勤講師とも連携を取ることが出来、個別指導等実施することが出来た。 ○前年度の反省を活かし、計画を進めることはできたが、探究に焦点を当てた進路指導が中学部ではまだ不十分なため継続して取り組む	B	進路検討会を十分に実施することが出来ず、全体への共有も不十分であった。また検討会は時間が多くかかるため、計画しても時間内に終わらないことも多く、複数回にわたって実施したり、報告・相談の仕組も含めて再度検討する余地がある。ガイダンスも単発になり、効果測定が不十分だったため次年度は一元化して計画的に取り組む必要がある。	重村雄太	
	③ 大学等連携やキャリア教育推進により、生徒の進路意識と学力向上のための環境整備を行う。	○生徒が主体的に進むべき進路について深く考えられるための進路ガイダンス、講演会等を実施し、生徒の進路意識向上を実現する。 ○年間の進路ガイダンス、講演会、研修会、自習室、進路資料室の整備をする。 ○進路関係の環境を整備し、学校全体が勉強をする雰囲気になるよう協力する。 ○夏期課外や個別指導を実施し、学力向上に効果的な指導を行う。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○進路ガイダンス、講演会などを滞りなく実施することが出来た。 ○各研修会を滞りなく実施することが出来た。 ○掲示物、自習室等環境を整備することはできたが、学びに向かう姿勢を醸成しきれていない ○滞りなく夏期課外、個別指導を実施することが出来た。その結果総合・推薦での合格率を高めることが出来た。	B	大学等連携も複数年実施しており、本校のプログラムとして定着してきた。今後はこの大学連携がさらに希望進路に関連させ、入学試験などに活用できるよう早期からの取り組みや、内容の高度化に取り組む必要がある。担任団は業務過多の中、生徒たちの個別指導の中で論文執筆活動によりそい、それぞれ生徒がやりがいを持てるレベルまで指導することが出来た。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
宗教部	① ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○聖書研究会 ○宗教委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	礼拝に学校内外の講師が来て下さり、毎日新鮮なメッセージを聴くことが出来た。特に国内外の遠方から、梅光生のために動画メッセージを事前に送って下さる講師に深く感謝した。生徒に賛美歌が浸透するように、毎日ではなく、基本週に一度変更し、今週の賛美とした。保護者にも毎日ライブ配信をし、恵みを分かち合うことが出来た。時には生徒も、礼拝でメッセージを語った。Baiko Visionに基づき、礼拝アンケートを2回実施した。さらに良いものにしていきたい。宗教委員会、音楽科も積極的に礼拝の司会、賛美リードにあたった。	A	礼拝はほとんどの講師がスライドを使い、よく準備して下さって、中高生に大変分かりやすく語りかけて下さっている。礼拝で挨拶や賛美歌、アーメンなどの声を出すこと、暗唱聖句を本当に暗唱できるようにするのが課題である。聖書の学び会を、生徒へ、保護者へ実施していきたい。		
	② キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝、卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○イースター ○クリスマス礼拝 ○特別チャペル(春季・秋季修養会) ○BCC(月一度の梅光コミュニティチャペル) ○夏と春のバイブルキャンプ/リトリート	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	今年のハイライトは、コロナで出来なかった開学150周年の合同クリスマス礼拝を、151年目に幼稚園・中高・大学と合同で、下関市民会館で持ったことである。中高からは聖劇とハンドベルの奉仕をした。コロナが終わり、今年からBCCもクリスマス礼拝も、保護者に開かれたものとなっている。丸山教会でクリスマスパーティーを開いた。サマーバイブルリトリートに国会議員の金子みちひと先生が来て下さり、スプリングバイブルキャンプは教会と合同で実施した。	A	BCCなどの自由参加のミッションスクールのイベントに、より多くの生徒や、また教員も参加してほしい。	後藤 献一	
	③ キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリアカジュアルデー募金を通して、里親スポンサーを啓蒙し、貧困にある子どもたちや地域を支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	今年は過去数年で最もサマリア募金が集まっている。4月から2月までで目標18000円(4人分)に届かなかったのは1回しかなかった。また2024年元日に起きた能登半島地震に合わせ1月は全学院で募金し、下関駅大丸前でも街頭募金を実施し、ワールドビジョンを通して送った。また大学のカンボジア研修旅行に初めて中高より12名の生徒が参加し、支援チャイルドの一人に会うことが出来た。ロクスひより山の子ども食堂にも多くの生徒が参加させていただいている。宗教委員は7月には海岸清掃を行った。	A	クリスマス献金も学院全体で集め8カ所に送った。保護者もよく協力して下さることに感謝している。ボランティアに参加する生徒に偏りが観られたので、今後は初めて参加する生徒も、より増やしていきたい。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2023年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
ICT教育推進部	① 生徒・教職員のICT活用促進およびICTモラルの定着	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒が主体的にICTを活用して学校生活・行事等をより「主体性」「協働性」「創造性」なものにできるようサポートを行う。</li> <li>○生徒が協働してICTを活用し、学校に付加価値を与えるものを作るためのサポートを行う。（ICT委員会の運営等）</li> <li>○生徒がICTモラルを身につけ適切な活用方法を学び実践できるよう研修などを企画・運営を行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 目標の80パーセント以上を実行できている。</li> <li>B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。</li> <li>C B未満</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校行事では生徒会を中心とし企画運営を行う中で、ICTを「主体的」「創造的」に活用する場面が多く見られた。</li> <li>○授業・委員会・学校行事などを通じて、学年問わずICT機器を使いこなすことはできた。</li> <li>○情報モラル教室や新年度オリエンテーションを通じてICTモラルについて学び、どう活用していくかを主体的に考えることができた。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>○行事において生徒が主体的にICT機器を活用する場面が多く見受けられた。</li> <li>○学年問わずICT機器を活用しているものの、学校に付加価値を与えるサポートが十分に行き届かせることができなかった。</li> <li>○次年度この項目を達成すべく対策を練る必要がある。</li> <li>○研修を通じICTモラルを身につけることができた。次年度はICT委員と協力し、生徒とともにより充実した企画運営を行っていきたい。</li> </ul>	川口駿純	
	② ICTを活用した授業の定着と授業外でのICT活用の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教員の授業へのICT導入サポート、研修の実施と次年度に向けたICT研修の考案</li> <li>○学校行事・部活動での活用イベントの企画し、広報物として活用ができるようサポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 目標の80パーセント以上を実行できている。</li> <li>B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。</li> <li>C B未満</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外部講師を招いての研修を実施することができた。</li> <li>○HPやSNSで生徒の活動の様子を発信することができた。また広報委員会もSNS投稿に携わり、生徒も校外への発信に参加することができた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>○外部講師の研修を通じてICTスキルを磨くことはできた。次年度も引き続きICTスキルを向上できるよう研修の考案に取り組んでいきたい。</li> <li>○校外への情報発信の流れが確立できたため、今後は内容のクオリティを向上させながら取り組んでいきたい。</li> </ul>		
	③ 校内ICT環境の維持・整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教室内のICT機器、教職員の使用する機器の管理、メンテナンス</li> <li>○生徒・保護者の質問対応及びICTに関するトラブル対応と担当業務の確実な遂行</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 目標の80パーセント以上を実行できている。</li> <li>B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。</li> <li>C B未満</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教室内での全員が確実にICT機器を使用できるよう設備の見直しを行い、整備を行った。</li> <li>○生徒・保護者からの質問や必要な対応は適宜行い、全教員が対応することができた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>○校内機器の管理を見直し、全教員が確実にICT機器を使用できる環境を整備することができた。</li> <li>○ICT教育推進部を中心とし、適宜生徒・保護者への対応をすることができた。</li> </ul>		